
IS 《インフィニット・ストラトス》 紅き傭兵の息子

サーシェス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス

IS 紅き傭兵の息子

【Nコード】

N3984X

【作者名】

サーシエス

【あらすじ】

これは紅き傭兵に拾われ、ISとは別のものを持った少年がIS学園に入学するお話。

プロローグ（前書き）

サーシエスと申します。

魔法少女リリカルなのは s t r i k e r s 転生した紅と蒼の修羅
神々の息抜き作品です
リリカルもよかったですらぜひ見てください

プロローグ

プロローグ

ある日の夕暮れ

赤髪の少年がそこにはいた。

そこは何もない荒地。

空を呆然と見上げている少年。

その少年に近づく人影があつた。

「なんででめえ見たいなガキがこんな所にいるんだ？」

その言葉に少年は振り返りいった。

「親に捨てられた。ただそれだけ……」

少年はただ答える。

「捨てられただ？はあゝめんどくせえ。おめえ名は？」

「……零斗」

「零斗か……お前俺と一緒にくるか」

少年と同じ髪の色の方が言う。

「・・・いいの？」

「こんな所に置いてくぐれえなら連れてったほうがマシだ・・・めんどくせえがな」

「・・・わかった」

少年はその青年についていく。

「あの・・・あなたの名前は？」

「あ？俺の名か？」

青年は振り返り

「俺はアリアル・サーシエス」

笑って言った。

「戦争が大好きな・・・ただの傭兵だ・・・」

これが紅き傭兵との出会いだった。

プロローグ（後書き）

誤字脱字、感想がありましたらよろしくお願いします

第0話「失ったもの」(前書き)

連続投稿です

こっちの方が書きやすいのは何だろうかw

第0話「失ったもの」

第0話「失ったもの」

久しぶりだな、零斗だ。

サイシエス 親父に拾ってもらって5年。今は10歳になった。

はつきり言おう。この5年間は地獄だった。それは、「自分は自分で守れるように訓練すつぞ」と言う親父の言葉が原因だ。訓練はとも辛かったが、中でも親父との模擬戦が怖かった。しかも10歳で戦場に連れて行かれた時は死ぬかと思った。

最近ISつてのが発表された。他の人は興味を持たなかったが、親父が興味を持った。半年が経つと親父がISのようなものを作った。名前はジェノサイダーという。オレンジの装甲に全身装甲左手にビームライフルがついていて、一番印象的なのが、右肩についたバスターソード。特殊武装でフアングと言うものがある。

コアも特殊でGNDライブといい、簡単に説明すると半永久的にエネルギーを生み出す物。親父が言うには「なんかできた」だそうだ。そして俺のコアも作ってくれた。こんな生活がいつまでも続くと思っていた。

あんな事が起こるまでは……

「ハアハア」

俺は走って家に向かっていった。

今日本にハッキングされた基地から2000発のミサイルが放たれた。

それは問題ではなかった。・・・それは

狙ったかのように1発のミサイルが俺の家に落ちた（・・・・・・・・・・・・・）

幸い俺は買い物で家を出ていた。が親父は家にいた。いやな予感がし、さらに早く走った。

「親父・・・無事でいてくれ・・・」

そして家についた。

「!？」

目に入っただのは、

ボロボロになり燃え続けている家と、

瓦礫の下敷きになって血まみれになっている親父の姿だった。

「親父!!」

「零斗・・・」

「今助けるからな!」

俺はすぐに親父の上の瓦礫を退かそうとする。くそぉ・・・うごか
ねえ

その瓦礫は重く子供がどけさせるには無理があつた。

「零斗・・・これを受け取ってくれ・・・」

親父が右手のものを俺に投げる。

「！これは・・・」

親父が投げたのは、俺に作ってくれたコアだつた

「零斗・・・俺は多分無理だ・・・」

「諦めんなよ！！親父」

俺は自然と涙を流した。すると親父が指で涙を払ってくれた。

「そんなしけた面すんなよ・・・」

そして俺の頬に手を当てる。

「親父・・・」

「零斗・・・お前の名をくれてやる・・・」

「！？・・・わかった。これからはアリアル・サーシェスと名乗
るよ」

「そうだ・・・それでいい・・・」

満足したようで、すこし微笑む

「零斗お前は俺より強い・・・」

「俺はまだ・・・親父より弱い・・・」

「俺が言っただ、お前は強い・・・ゴフッ！」

「親父!？」

親父は血を吐く。

「ハアハア・・・そろそろ限界みてーだな」

「親父・・・」

「それじゃあな・・・零斗」

「俺の・・・最初で最後の最高な息子だったぞ」

そして俺の頬から、手が滑り落ちる・・・

もう戻らないたった一人の家族・・・もう戻らない日常・・・
俺は親父の手を握った。空を見上げ、今もミサイルを叩き切る白騎

士が目に入る。

その姿は救世主のように見えるが、俺には見えなかった。俺の大切なものを奪った、悪魔にしか見えなかった……

「ウオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！！！！！」

この日俺は、唯一の家族を失った。そして決めた。

『親父よりも強くなって、白騎士と篠ノ之束に復讐すると』

「ここがIS学園……」

あれから5年が経った。そして戦争に出て、ひたすらに殺し力をつけた。

「いこーぜ、アルケー」

その言葉に反応するかのように、首の紅い十字のブレスレットが光った。

このIS学園に紅き傭兵が乱入した・・・

第0話「失ったもの」(後書き)

誤字脱字・感想待ってます。

次回はキャラ設定

キャラ設定&機体紹介（前書き）

あれ？息抜き作品なのに、こっちの方がいい案が思いついてしまう
w

キャラ設定&機体紹介

名前 アリアル・サーシェス（本名は零斗）

年齢 15歳

身長 178cm

体重 66kg

見た目はるるうに剣心の緋村剣心で髪は赤色で目はつりあがっていて金色

声は……読者の想像におまかせします（ひろしボイスでも可w）

好きなもの 戦争、戦い、家事、GNコアや兵器の開発、親父

嫌いなもの 白騎士、織斑千冬、篠ノ之束、人を見下す奴、親父をバカにする奴

性格 口調は悪いが普段は優しい？ノリもよいが怒るとめっちゃコワイ。戦闘になると容赦はしない

需要 過去

5歳の頃に捨てられ、偶々通ったアリアル・サーシェスに拾われる。

その頃から訓練されていた。（この時点で親と同じぐらいの強さ）

10歳の頃親父がGNコアを作成。ソレと同時に白騎士事件が起き、ミサイルが家に直撃し親のアーリー・アル・サーシェスが死亡。

その時に名前を託され零斗からアーリーアルサーシェスに名を変える。

現在

身体能力は親父の3倍、下手すれば素手でISと戦える。GNコアと兵器を自分で作れるようになり、頭脳は束と同等。親が家事をできなかったので必死に覚え、今では料理は一夏より料理がうまい。5年間アルケーの姿で傭兵をしていたため、『紅き傭兵』と呼ばれるようになった。

戦いの時は一切の手加減をしない。親父関連のことを侮辱のは禁止でした者は……言える事は殺気がハンパないです。学校で唯一、織斑千冬に反抗できる者。戦い好きなのは親の影響であるw
恋愛については結構鋭い。

機体説明

名前 アルケー

武装 GNバスターソード

GNビームサーベル×2

GNシールド

GNフアング×10

外見はまんまアルケーガンダム（コアファイターは一応つけときます）

需要

親父が作ったジェノサイダー（スローネツヴァイ）の後継機としてサーシエスが製作。

武装はこれからもっと増えるらしい

GN粒子の色は赤色（害はない）

特殊兵器

TRANS-AMシステム

これは機体内部に蓄積されていた高濃度圧縮粒子を全面開放することとで、一定時間スペックを3倍以上に上げることができる。しかし、このシステムは大量のGN粒子を消費するため、使用後は再チャージまで機体性能が低下する、諸刃の剣で現在サーシエスがどうすれば機体性能が落ちないかを研究中。（研究が成功がするんじゃない？と内心想っている作者がいるw）

GNコアについて。

親父が「ノリ」で作ったら完成したコアで動力を半永久的に得る事ができる。

ノリで作ったため、詳細が不明。サーシエスは4年間研究して自力で作った。

なおサーシエスに聞くと、これをノリで作った親父はチート（サーシエス談）とのこと。

（おまえはそれ以上のチートだろ、と思うのは作者だけなのか？

親父の持っていたコアは火事後、親父の傍で見つけ、お守りとして所持している。

現在製作したコアは3基。（お守り含め）これは全部オリジナルコ

ア。

息抜き作品なので今は、GNDドライブ、イノベーター、超兵、その他は出さないと思います。

キャラ設定&機体紹介（後書き）

あれ？めっさチートになつとるWWW

ヒロインどうしよっかな。鷹月さんとかオリヒロインでもいいな
ゝw

感想、意見、ヒロインの案など、どしどし応募してください

いきなりですがアンケート!! (前書き)

アンケートです

いきなりですがアンケートー！

「いきなりですがアンケートー！！！」

これからサーシェスのヒロインを決めるアンケートを取りますー！！

1、セシリア

2、シャルロット

3、ラウラ

4、更識姉妹

5、オリヒロイン

一応これが候補です。もし他にもこの人がいいというのがあれば送ってください。

個人的には一夏ラバースとサーシェスは合わないと思っていますが候補には入れました。

感想などから投票してくださいー！！

締め切りは、あまりにも話が思いつくので早めになりたいと思い

ます。

10月11日の24:00まで受け付けたいと思います。

締め切りは早いですがたくさんの応募まっています!!!!!!

第1話「自己紹介だぁ?・・・めんどくせえ」(前書き)

息抜き作品のはずがもうお気に入り登録が27件!

これは頑張らないと!!

ゆっくりみていてね

第1話「自己紹介だあ？・・・めんどくせえ」

第1話「自己紹介だあ？・・・めんどくせえ」

「全員揃ってますねー、それじゃあS H Rを始めます」

黒板の前でニツコリと微笑む女はこのクラスの副担任、山田真耶

身長は低め、しかも服のサイズがあってないのかだぼつとしており
尚更小さく見える、あと黒縁の眼鏡も大きいからずり落ちそうだ。
言うなら子供が無理に大人の格好をしているってカンジだ。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

山田先生が言うが教室全体は静まり返っている。今、クラスの視線
は俺と俺の前に座る男子生徒に女共の視線が集まっているからだ。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えーと、出席番号順で」

それともうひとつ原因がある。それは俺だ。俺の格好は、IS学園
の制服で前のボタン全開で中に着ている黒いシャツが見えている。
そして極め付けに、机の上に足を乗つけてるから、周りからの視線
がウゼエ・

「アリアル・サーシエス君っ」

「へーい」

気のない返事で立ち上がる。すると周りからの視線が一気に俺に集まった。・・・

「アリアル・サーシェスだ。俺は元傭兵だ。そして俺はISではなく、MSつてもんに乗ってっから

間違えんなよ。それと趣味は兵器開発だ」

といい座り、また足を机に乗せる。

『・・・』

しゅんと静まり返っている。それもそうだろう。なんせ俺は『人殺し』といったもんだからな。

「え、えーとじゃあ次は・・・」

その雰囲気を変えようと、次に進める山田先生。

「織斑一夏くんっ」

「はっ、はい！」

ぼけっとしてたんだろうか。

いきなり大声で呼ばれた男子生徒の声が裏返った。

「あつ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい、お、怒ってる？ 怒ってるかな？ ゴメンね、ゴメンね！ でも自己紹介『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね、だから、自己紹介

してくれるかな？　だ、ダメかな？」

「大丈夫ですから先生、怒ってませんし、自己紹介もちゃんとしますから。」

「ほ、本当ですか？」

「え」と、織斑一夏ですよろしくお願いします・・・」

は？もしかしてこれで終わりなのか？こいつ。周りから『何かもつと言ってよ？』みたいな視線が送られてるぞ。

「・・・以上です！」

がたたっ！思わずクラスの女子がずっこけた
俺は呆れて何も言えない・・・

パンツ！いきなり頭を叩かれた。

「いつーーーーー！？」

「……」

俺が見るとそこには黒のスーツにタイトスカートに身を包んだ女がいた

「げえっ、関羽！？」

パンツ！一夏が叩かれた。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

こいつ・・・バカだろ・・・

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかつたな」

「い、いえっ 副担任ですから、これくらいはしないと……」

千冬姉は生徒の方を向きながら胸に手を当てて発言する

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言う事はよく聞き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠15才を16才までに鍛え抜く事だ。逆らってもいいが、私の言う事は聞け。いいな」

暴力宣言を言った。

だが、教室には困惑のざわめきではなく、黄色い声援が響いた。

「キャ———！ 千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！ 北九州から！」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

その言葉を聴いたサーシエスは

（ハア？死ぬるだ？そんなに死にてえなら俺が殺してやろうか？）
と危ないことを考えていた。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？ 私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

騒がしさを増す女子に千冬姉は凄まじく鬱陶しそうに顔をしかめた。

「きゃああああああつ！ お姉様！ もっと叱って！ 罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躰をして〜！」

あゝもう、突っ込むのやめよ。

「お前はろくに自己紹介もできないのか？・・・それとアリアル、机の上に乗せている足を下ろせ」

と言ってくるが

「アア？やだね」

即答する。

また、シーンと教室が静まり返った・・・

「ほう。お前は教師に口答えするのか？」

「そついうてめえは誰に物を言ってるのがわかってんのか？」

俺は千冬だけに殺気をぶつける

「チツ・・・勝手にしろ」

千冬は殺気を受けて敵わないと思ったのだろう、舌打ちをして説得を諦めた。

はっ！ざまあねえな。

「SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませる。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

『はっはい！』

こうして俺の学校生活初日は始まった・・・

第1話「自己紹介だぁ?・・・めんどくせえ」(後書き)

どうでしょうか?サーシエはいきなり千冬と衝突しました。

アンケートに投票してくれたかたがたありがとうございます!

感想、アンケートなど待ってマース。

第2話「誰に喧嘩売ったか、わかってんのか？」（前書き）

アンケート途中結果

セシリア 2票

シャルロット 4票

ラウラ 1票

更識姉妹 4票

オリヒロイン 4票

第2話「誰に喧嘩売ったか、わかってんのか？」

第2話「誰に喧嘩売ったか、わかってんのか？」

「・・・であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によって罰せられ・・・」

IS学園には入学式にも授業があり、現在も授業の真っ最中である。そんな中、サーシエスは・・・

「（ - ω - ） z z z」

寝ていた。

寝顔はともかわいらしい。サーシエスはISの知識はすべて覚えており、授業で聞かなくてもわかる。寝顔が見える先生二人は「かわいい・・・」とか「起こすのは凌ぎないな・・・」

とかいつており、起こされないのも理由である。それでいいのか！？教師！

寝ている中でサーシエスにはバシンツ！と誰かが叩かれた音しか聞こえていなかった。

授業が終わり、寄ってきた一夏、その他女子はその寝顔に和まされていた・。

一部の女子は鼻を押さえて何かを堪えていた・・・

くサーシエスく

「く（＝ハ　ハ＝）／ふあーよく寝たく」

授業つける必要ねーから寝てたけど、まさか起こされないとはねく

「アリアル起きたか。ならこれから再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めたいと思う。」

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席・・・つまりは、まあ、クラス長だな。立候補者はいないか？推薦でもかまわんぞ？」

クラス代表ねえく

俺は100%選ばねーから、関係ねーだろ。

「はい！織斑くんを推薦します！！」

「私もそれがいいと思います！！」

「わたしもー！」

やっぱり、織斑にいったか・・・

しかし

「私はあーくんを推薦するよー」

はっ？あーくんって誰よ？

「私もアリアル君をすいせんします！！」

それを皮切れにポンポン手を上げる女子。あいつはたしか・・・布
仏？だったか。変なあだなつけやがって・・・

「ちょ！待った！俺はそんなのやらなー」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権はない。
選ばれた以上覚悟しろ。」

「いや、でもー」

まだ反論しようとする織斑。いい加減諦めろ・・・そのとき甲高い
声が響いた。

「待ってください！納得がいきませんわ！」

誰だ？あの金髪ドリルは？

「男がクラス代表だなんて、いい恥さらしですわ！このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたしはこのような島国まで訪れてサーカスをする気は毛頭ありませんわ！」

へえー極東の猿ねー・・・潰すぞてめえ・・・

この時サーシエスから漏れている殺気を千冬だけが気づいていた

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

それは同感だ！この中で一番強えーのは・・・俺か？

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で——」

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ、世界一まずい料理で何年覇者だよ」

織斑もいうねー

「あなた私の祖国を侮辱しますの！」

いや、さきにしたのはおめーだろ

「決闘ですわ！」

「ああ。いいぜーやってやるさ！」

「そちらの方でもすわよ！」

なんか勝手に巻き込まれてるし・・・

「いや、俺はいい」

下手すりゃ、殺しちまうからな。それに怒ったオルコットが

「あなたは私に負けるのが怖いんですの？」

「・・・あ？」

なんつった？コイツ

「ISとは違う物をもって、ここに来て、それに加えて傭兵の癖に臆病者。まったくあなたを育てた親の顔を見たいですわね！」

ブチッ！ もう我慢ならね・・・

俺は教室全体に禍々しい殺気を放出した・・・

くー夏く

「てめえ、黙って聞いてりゃあ好き勝手いいやがって・・・殺すぞ
！！」

強いさ殺気がサーシエスから出てきた。
オルコットは顔を青くさせている。含んだクラスの女はみんな涙目

になっている。千冬姉はその殺気に立ち竦んでいる。

「いいぜ・・・決闘を受けてやんよ！」

「き、決まりですわ！私がハンデをお付けしましょうか？」

「は！んなもんいるかよ！！精々死なねえように頑張りな！！」

といって教室から出て行った。その展開に啞然としていたが

パンパン！

早く復帰した千冬姉がその場を纏めるかのように千冬姉が手を叩く。

「では来週、クラス代表決定戦を行う。最初はアリアル対オルコット、その後勝ったほうと織斑でいいな。」

『は、はい』

「それでは山田先生授業を・・・」

「はい」

それから授業は再開した。

この時俺は知らなかった・・・

クラス代表戦があんなことになるなんて・・・

第2話「誰に喧嘩売ったか、わかってんのか？」（後書き）

いかがでしたか？

もう代表戦が始まってしまふ。アンケートの期限はやめようかな？

感想、アンケートどしどし応募してください

アンケート結果発表！！さらにアンケート！！（前書き）

顔文字のことで感想を頂きました。

顔文字は意外な一面と言うことで書きました。
でも人殺しなのでニコポとかはありません。

それと今後はサーシェスのセリフ時には顔文字は使いません！！

他のキャラなら・・・使ってもいいですよ？

アンケート結果発表！！さらにアンケート！！

アンケート結果発表！！！！

えーとサーシェです。アンケートを10月11日の24:00

としていましたが、このままだとすぐにセシリア戦に入りそうなので

勝手ながら締め切らせていただきます。

それでは結果発表！！！！

1、セシリア 1票

2、シャルロット 4票

3、ラウラ 1票

4、更識姉妹 5票

5、オリヒロイン 6票

！！

と言う結果からヒロインは5のオリヒロインになりました
たくさんの投票ありがとうございました！！

そして次はオリヒロインの事で決めたいとおもいます。
オリヒロインの容姿や、需要など簡単に書いてもらいたい
と思います。

こんなカンジで

さん

名前 毒島冴子

容姿は学園黙示録 毒島冴子

冴子はサーシエスと同じような人間。

これは簡単すぎですがこんなカンジで送ってください。

そのなかでよさそうなのを作者が決めたいと思います

締め切りは今日の24:00とさせていただきます。

アンケートを取り次第すぐに次話投稿させていただきます！！

今一度アンケートにご協力お願いします!!!

しつこくてすいません!!これより最終アンケートを取りマース!!!!!!

しつこくてすいません!!これより最終アンケートを取りマース!!!!!!

オリヒロインの候補が3人出ました!!それから作者が考えたヒロイン合わせて

4名の中から選ぶと思います!!!!

1、名前 鴉羽 容姿はセキレイの鴉羽

性格は戦闘狂でHELLSINGの少

佐のような感じ

2、高木由美子 / 由美江 見た目もそのまんま
二重人格なので、所謂OOのアレルヤの様な

感じ

3、群雲翔 むらくもしょう

容姿 ガンダムOOのフェルトの髪を青く

した感じ。

性格 冷静沈着。何言われようと鉄面皮。ただし父親のことを悪く
いわれると若干不機嫌になる。

詳細（勝手に考えた）

イギリス人。6歳の頃家族旅行で行った中東にてマフィア？の抗争
に巻き込まれ両親は死亡。マフィアによって売り飛ばされそうにな
るも、依頼でマフィアを潰しに来た傭兵群雲効によって保護、養子
になる。その際名前も群雲翔となり、日本国籍も得る。その後は効
共に各地を巡りながら、効から傭兵の全てを教えてもらう（ちなみ
に強制ではなく彼女の意志で）。14の頃に受けたIS適性検査で
Aを出し、1年間の訓練を経て日本代表候補生になる

4、そして作者が考えたキャラ

名前、篁 唯

容姿 マブラブの篁唯そっくり

サーシエスと同じく白騎士事件により家族3人が死亡。これ
により篠ノ之束、白騎士

を恨んでいる。サーシエスには及ばないがその次に強い。

冷静な性格。親のことを言われると、怒る。サーシエスと部
屋は同じ。

この4つの中から選んでください。

期限は10月10日の12:00まで受け付けます。

これが最後のアンケートになります。

しつこくてすいません・・・こんなにしつこくアンケート
を取るのはいくらいいでしょうか？

パクロスさん、レンさん、スタドラさん、キャラを考えてい
ただきありがとうございます！

しつこくですいません!!これより最終アンケートを取りマース!!!!!(後書

こんなにしつこくアンケートをとってしまい、反省しています。

アンケートが終わり次第すぐに本編に入ります。

外伝「親父の地獄の特訓」(前書き)

親父に鍛えられた5年間です。

キャラ崩壊が起きています。

外伝「親父の地獄の特訓」

外伝「親父の地獄の特訓」

1年目・・・

「零斗」

「なに？親父？」

「俺はおめえを守らねえーから自分は自分で守れるように訓練すぞ」

「は？」

それは唐突だった。拾われて1日目にして言われたことだった。

「そんなわけで・・・これを毎日やれ」

そういつて、紙を渡してきた。

その内容はとてもひどいものだった・・・

腕の筋力トレーニング・・・1000回

肩の筋力トレーニング・・・1000回

胸と背中の筋力トレーニング・・・1000回

腹部の筋力トレーニング・・・1000回

足と脚の筋力トレーニング・・・1000回

ランニング42?

何この鬼畜！これは5歳の俺にやれと・・・

「親父・・・これ1日でやるの?」

「ああ。それでも減らしてやってんだ、少しは感謝しろよ。」

これが5歳児の俺にたいする優しさか・・・この人に拾われてよかったのか?

そんな事を考えながら、1年間やり続けた・・・

そして・・・2年目

俺の体は細身だが筋肉はしっかりつき、体力もついた。

「じゃあ、これから出かけるぞ」

「うん」

この時ついていった、俺がバカだった。

数分後・・・

「親父・・・なんでこんなとこ来たの？」

そこはジャングルでした

「あ？そりゃあ・・・」

そして俺の服の襟を掴む・・・もしかして

「おめーを鍛えるために決まってるんだろ！！」

「このクソ野郎オオオオオ！！！！！！！！！！」

ジャングルに向かってスローインされましたw

ドスッ！

「いつてゝゝんいつの間にポケットに？」

ポケットの中から親父からの手紙が入っていた。

「何々『ジャングルで1年間サバイバルしてる。それとトレーニングは前の10倍だから

1年経ったら迎えに行くから……死ぬなよw』……
・どちくしょーが!!!」

文句を言いながらも、1年間言われた事を行った俺はいい……

3〜4年目……

「お〜おめえ、よく生きてたな」

「殺すぞ……親父……」

何とかジャングルから出てきました!……体は顔以外傷だらけ

「じゃあ、今日から俺と模擬戦な。筋力トレーニングはそのままやれ」

「親父は、俺を殺したいのか!?!」

文句を言いながら、結局やりました。

模擬戦中の会話〜3年目〜

ズガガガガ!!

「おらおら、逃げてねえで避けやがれ!?!」

「俺を親父と一緒にすんな!?!」

「あめええんだよ!!!」

「げふううう!」

この2年改めて親父がチートだと思いましたw

最後の5年目……

キン!キン!

親「隙だらけだぜ!!」

シュツ!! 隙をついた鋭い蹴りを放つ

零「しまっ!……なんていうと思ったか?!」

親「なに!?!」

その蹴りを体をしゃがませて避け

零「ちよいさー!」

ドス! しゃがんだ状態からの回し蹴りをあて、吹き飛ばす

親「ぐふお」

そのまま吹っ飛ばされた、親父に近づき、ナイフを突き立てる

チャリ・・・

零「俺の勝ちだな・・・親父」

親「はあゝゝわったよ。俺の負けだ、負け！」

親父は立ち上がる

親「にしても強くなりすぎじゃねえーか？お前」

零「あんな事、5年間やったら誰でもこうなるわ！」

親「いや、10歳で俺に勝つお前はおかしいと思うぞ？」

笑いながら話す・・・だが親父の一言で初めて気づいた

親「そういや、おめえ・・・戦闘中俺の言葉遣いになってたぞ」

零「・・・・・・・・」

すっかり、染められた零斗だった・・・

外伝「親父の地獄の特訓」(後書き)

いかがでしたか？

次からは絶対に本編に入ります。

感想など待ってマース

最終アンケート結果発表&ヒロイン設定

最終アンケート結果発表&ヒロイン設定

オリヒロインの結果発表をします！！！！結果は4番に投票した人が多かったので

4番の簗 唯依に決定しました！！

ヒロインアイデアをくださった、パクロスさん、レンさん、スタドラさん

ありがとうございました！！

それでは、今日即席で考えたヒロイン設定です！

名前 簗 唯依

身長 169cm

体重 黒くぬりつぶされています

3サイズ ボン、キュ、ボン としかいいようがない

見た目 マブラブ 篁 唯依

好きなもの 戦い、家事特に料理、サーシエス

嫌いなもの 白騎士、織斑姉弟、篠ノ之束、人を見下す奴

性格 冷静。戦いになると豹変する

需要

サーシエスと同じく傭兵で白騎士事件のときにミサイルが家に被弾、家族3人が死亡

篠ノ之束 白騎士を恨んでいる。サーシエスには及ばないが次に強い。

射撃ではサーシエスと同じかそれ以上。

サーシエスの親父に鍛えられている可能性がある。

サーシエスと同じ部屋で自分と同じ境遇や容姿などもあり、徐々にサーシエスに惹かれていく

機体はそのうち決めたいと思います

最終アンケート結果発表&ヒロイン設定（後書き）

いかがでしたか？

サーシエスのどこが好きになるかイマイチわからなかったのですねりました

次回は部屋の話と代表決定戦の最初になりますと思います
あゝはやく戦闘書きたい！！

感想などとしどし待ってマース

第3話「部屋の同居人は似たもの同士！」（前書き）

おまたせしました！投稿します！

オリヒロイン登場！

そしてキャラ崩壊・・・なのか？

第3話「部屋の同居人は似たもの同士！」

第3話「部屋の同居人は似たもの同士！」

「あゝ疲れたゝ」

「ふあゝゝ」

机に突っ伏している織斑と寝起きの俺。俺はあの後少し落ち着いたので教室に戻った。

そして自分の席について寝たらいつの間にか放課後になってた。

「ああよかった、まだいました」

教室に入ってきたのは山田、織斑先生。

先頭で入ってきた山田は相変わらず、ぼわぼわしている

「お二人の部屋が決まりました」

その言葉にえつと驚く織斑。

それをスルーして山田に聞く。

「山田先生。俺の部屋の鍵をくれ」

「は、はい。アリアル君の部屋は1026号室です」

若干びくびくしている山田から鍵を受け取る

「アリアル。お前の荷物はすでに送ってある」

「そりゃあどうも」

といい、教室を出て部屋に向かった。

一応ソックをして入る。親父はソックをせずに部屋に入ってきたが、俺は傭兵だが一応常識は弁えている
中からどうぞ、っと凜とした声が聞こえたので入る。

最初に目に入ったもんは……。

綺麗な黒髪でまさに大和撫子といわれとも可笑しくない女だった。

「同居人の篁 唯依だ。よろしく」

「アリアル・サーシェスだ。よろしく」

そして握手をする。終わると篁が聞いてきた。

「間違っているならすまないが……お前の本当の名前は零斗じゃないか？」

「!？」

こいつ、なんで俺の名を！後ろに飛びのき距離をとる。

「てめえ！なんで俺の名を知ってやがる！答えろ！！」

俺はホルスターからナイフを取り出し切っ先を向ける

「落ち着いてくれ。私は君の名を師匠から聞いたのだが・・・」

あ？師匠？俺の名を知ってるのは一人しかいねはずだ・・・まさか！！

「そうだ。私の師匠の名前は、アリアル・サーシエスだ」

同居人とのファーストコンタクトはどんでもねえものだった。

その後、ナイフをしまい、ベッドに腰をかけ、親父にあつた事情などをそれぞれ話した。
だが、篋がもつともな事を聞いてきた。

「そういえば、なぜ師匠の名を使っているのだ？」

言っても大丈夫かね

「親父が死んだからだ・・・」

「なに？」

「今から説明する（ただいま説明中・・・わからない人は第0話を見てください）ってなわけだ」

「そうか・・・師匠が」

悲しげな顔をする篁。そして沈黙が流れる。

「お前は私とにているな」

「どういつこつた？」

「私を拾ってくれた家族は白騎士事件の時のミサイルで私以外の家族が死んだのさ・・・」

目に涙を浮かべ、拳を握り締めている。

その拳からはポツリ、ポツリと血が垂れていた。

こういう事すんのは、俺にはむかねえが・・・しかたねえ

サーシエスは立ち上がり、篁の隣に座り、そして・・・・・・・・・・

ギュッ

「!？」

抱き寄せた

「一体何を！」

顔を紅くして、振り払おうとする篁に

「泣きてえときは、泣け」

「！」

ビクツと体が反応した。

「無理に我慢する事はねえ、俺の胸でも貸してやるから泣いてもいいぜ」

「……………」

黙っている篁。はあく殴られそうだな。

だがサーシエスの予想は大いにはずれた。

「……………すまないが、少し胸を借りる」

「は？」

サーシエスは理解できていなかったが、篁はお構いなく胸に顔をおしつけ声を押し殺して泣いていた。

「よっぽど、溜めてたんだな……………」

サーシエスはただ篁の頭を泣き止むまで撫で続けた

「す、すまなかったな……………」

「俺が勝手にした事だ、別に気にすんな」

自分がやったことを理解して顔を真っ赤にしている篁。

「よかつたらなんだが・・・私を名前で呼んでくれないか？」

突然の申し出に困る、サーシェスだが少し考え・・・

「別にいいぞ。なら俺のことも名前でいいわ」

「本当か！？・・・なら改めてよろしく頼む。サーシェス」

「こちらこそだ、唯衣」

ふたり微笑んでそれぞれの手を取り握手をする。

その後、二人で食堂に行き、食堂から帰ってきたら二人はすぐに寝てしまった。

第3話「部屋の同居人は似たもの同士！」（後書き）

いかがでしたか？

サーシエス（親父）はこんなことしませんが、零斗は少し親父に似ただけで、こういう事はします。（唯衣限定ですがw）

そしてフラグのようなものを立てたつもりです。

みなさんが待っているセシリアの処刑ですが後2話ぐらいかと思えます！

楽しみにしててください！

感想など、どしどし待ってます！！

第4話「クラス代表決定戦！手始めにオルコット！ご臨終だ！」（前書き）

せっかくフィニッシュ！と思ったらいきなりのフリーズ・・・
保存しとけばよかったな・・・

第4話「クラス代表決定戦！手始めにオルコット！」ご臨終だ！」

第4話「クラス代表決定戦！手始めにオルコット！」ご臨終だ！」

「サーシエス」

チュン、チュン

「ん・・・」

鳥の鳴き声で目を覚ます。

目を擦りながら、布団から出て制服に着替える。

「おはよう。サーシエス」

「おはよう。唯衣」

着替えが終わると、洗面所から唯衣が出できた。

「それじゃあ、食堂に行きましょう。」

「そうだな」

俺も顔を洗い、部屋を出た後、二人で食堂に向かった。

食堂に着き、朝飯を食った。

食堂の飯はうまかったが、周りからの視線がうざかった

朝飯を食い終わり、教室に向かう途中、誤っている織斑と不機嫌な篠ノ之を見かけた。

確かに隣の部屋は騒がしかったが、あのバカは何しでかしたんだ？

授業が始まると同時に織斑には専用機が渡されるになった。
専用機か・・・もしかして篠ノ之束が一枚かんでんのか？

おもしれえ・・・バカには悪いが潰させてもらっ・・・

そして、代表決定戦当日

「アリアル、お前が先だ。準備しろ」

「了解」

千冬に言われ、俺は首のネックレスに念をこめる。そしてアルケーを装着。

光に包まれてから0.3秒で全身が紅い装甲で覆われた

細いシルエットに、異様に長い四肢。右手についている大型の紅い大剣GNバスターソードと左手についている白い盾GNシールドを持ち、腰の左右についているバインダー、そして顔には4つの目がついていて、背中からは紅い粒子が出ているMS、それがアルケーガンダム。

「な、なんだよこれ……」

「禍々しすぎる……」

織斑と篠ノ之が言うのも無理はない。

それは教師二人から見ても、それはあまりにも禍々しいものだった。

そんな中、唯衣が近づいてくる。

「サーシエス。いつてらっしゃい」

「ああ。いつてくる」

そして、カタパルトまで歩みを進め

「アルケーガンダム、目標を殺戮するぜ！」

発進する際の台詞を言った瞬間、シンの体は外界にへと吐き出された

「フルスキン全身装甲ですって!?
何ですのそれは!?!」

「こいつはアルケー俺の相棒だ」

驚いていたオルコットだったがすぐにサーシエスに向けて巨大なレーザーライフルのスターダストmk?を向ける。

「あなたにはチャンスをあげますわ」

「あ？」

「泣いてでも頼めば、少しは手加減して差し上げますわよ」

「んなもんいらねーよ。俺の親父をバカにしたんだ、てめーも覚悟しろよ。」

「そうですか・・・ならおお別れですわね！」

キューイン！

言葉と同時にレーザーが放たれるが、サーシエスは最低限の動きで避ける。

「!？」

「オルコットさんよ・・・俺を楽しませてくれよ!!」

サーシエスはバスターソードを右手に持ち、突撃する。

「正面から!？なめられたものですわね！」

オルコットはトリガーを引きレーザーを放つが、サーシエスはスピ

ードを落とさずさらにスピードを上げながら、レーザーを避けていく。

「くっ」

「ちよいさー!」

すれ違うようにしてバスターソードでライフルを横に両断する。

「く!これならどうですか!」

オルコットは一旦距離を開けると腰部から4つのビット、BT兵器を射出した。

サーシエスはそれを避けるが、一発がバスターソードに当たり、手から離れ重力にしたがって落ちていく。そして一斉にビットからレーザーが放たれる。

この試合を見ている者は決着が付くと思っていたが……

「ところがギッチョン!」

アルケーの両爪先からビームサーベルを出現させ、足を巧みに使い、レーザーを叩き落とす。そしてビットにすばやく近づき、素手と足のビームサーベルで破壊した。

「惜しかったなあ、オルコット」

サーシエスはマスクの中で笑っていた。

くモニター室く

モニター室では一夏、箒、山田先生、織斑先生、唯衣がその戦いを
見ていた。

—「す、すげー」

山「すごいですね、剣を落とされた以外まだ一回も当たっていませんよ！」

箒「あの剣を落とされたのはわざとにしか、見えないな・・・」

唯「ああ、それはわざとですよ」

千「箒、なぜわかる」

唯「それは、サーシエスが本気だったら既にオルコットは死んでますよ」

「「「「!?!?!」」」」

みんなは驚愕する。

唯「みなさんは、『紅き傭兵』って聞いたことはありませんか？」

—「俺はないな」

箒「私もだ」

山「私もわかりません」

千「聞いたことはある。たしか紅い鎧を纏、戦場をかけ、敵をすべ
て殺しつくすと聞いたことは

あるが・・・まさか！」

唯「そうです。紅き傭兵は彼ですよ」

「「「「!?」「」「」

「アリーナ」

戦いはすでに終わろうとしていた。オルコットは隠していたミサイ
ルビットも破壊され武装は近距離武器のインターセプトしかない。
それにくらべサーシエスはほぼ無傷だった。

「こんなもんなのかよ、代表候補生つてのはよ・・・」

「ハアハアハア・・・」

「返答なし・・・なら楽にしてやるよ!」

すると腰のバインダーが開き

「いけよ、ファング!」

白い牙のようなビットが6機出てくる。

「そんな、なぜBT兵器が!?!」

オルコットにとっては絶望的だった。ファングから紅いビームが発射され、そのすべてが叩き込まれる

。すでにシールドエネルギーは100を切っていた、そしてオルコットに歩み寄る、サーシエスの姿はまるで悪魔のように見えた。

「いや・・・こないで・・・」

無常にも徐々に近づき、そして二人の距離はすでに開いていなかった。

「俺の親父を馬鹿にしたんだ・・・死んでわびてろ!」

サーシエスはバスターソードを振り上げ

「ご臨終だ」

「イヤアアア!!!!」

一気に振り落とした。

ガギン!

しかしそれを誰かが受け止めた

「なんで邪魔すんだよ。」

「どうして・・・あなたが」

それを受け止めたのは白いISを纏った唯一の男操縦者

「そうだろ！！織斑君よ！！」

「殺すのだけは絶対にさせねえ！」

専用機『白式』を纏った織斑一夏だった・・・

第4話「クラス代表決定戦！手始めにオルコット！ご臨終だ！」（後書き）

いかがでしたか？

どうも、戦闘描写は苦手です。長くなりそうなので分けました。

感想、意見、アドバイス、など送ってくれるのをまってます

第5話「決着！・・・興が冷めた」（前書き）

お気に入り数が100件突破！！

こんなに読んでくれる人がいてとてもうれしいです！！

第5話「決着！・・・興が冷めた」

第5話「決着！・・・興が冷めた」

くアリーナく

ガギン！、ガギン！

「せっかくのお楽しみを邪魔しやがって・・・落とし前つけろや織斑君よ！！」

「くっ」

オルコットをかばった織斑は現在サーシェスと戦っている。
だが明らかに力の差があり織斑はあしらわれている。

「ハッ！機体がよくても操縦者はイマイチだな！」

「ぐー！」

バスターソードをライフルモードに切り替えトリガーを引く。まだ
扱え切れていないのか、
ビームがすべて直撃する。

「うおおおお！！」

織斑は一直線にサーシェスに突撃。そして互いの武器が接触、鏖競
り合いになる。

剣がぶつかり火花が散る。

サーシエスは押し切ろうとしたが、

「はあああ！隙アリですわ！」

「てめえ、まだ動けやがったのか。元気なこつた！」

ボロボロのオルコットがインターセプトを持ち、サーシエスに振るが、

「俺にはこいつがあんだよ！」

右の爪先から赤いビームサーベルを出し、受け止める。

「威勢良くでてきた割にはその程度かよー！」

「うわ！」

「きゃ！」

織斑を剣で、オルコットを足のビームサーベルで押し返す。

「死に底ないが！とつととくたばりやがれー！」

バインダーからファングを6機射出。

そしてファングの先端に赤いビームサーベルが形成される。

「イツちまいなー！」

ファングはオルコットに向かい、赤いサーベルがブルーティアーズ

の装甲に突き刺さる。

そして、火花をあげ爆発する。

「キャアアア！！！」

吹き飛ばされたオルコットはISが強制解除される。

オルコットには目立ったケガはなかった。そしてファングをしまう。

「ちっ！運のいい奴だ。いい加減でてこいよ。・・・それとももうくたばったのか？」

織斑が飛ばされたほうに視線を向ける。そこには雪片から青いビーム、零落白夜を展開した織斑がいた。

「うおおお！！！」

そして一直線に突っ込んでくる。アレに当たればビーム兵器は無効化、シールドエネルギーも大幅に削られるがサーシェスには関係ない。

「なんでてめえがソレを使えるんだ？けどな、うりゃあ！動きが単純なんだよ！！！」

バスターソードで受け止め弾くと同時に脇腹に回し蹴りを叩き込む

「ぐあっ！！」

アリーナの壁に衝突。そして瞬間加速を使い、イケニッション・ブースト間合いを詰める。
バスターソードを振り上げ

「こいつで・・・しめーだ!!」

縦に振り下ろす。風を切り織斑に近づくバスターソードに誰もが息を呑んだ。

だが振り下ろされる寸前、織斑の前に黒い何かが割って入った。

「これ以上の戦闘は認めん」

そこには打鉄を纏い、バスターソードを受け止めている織斑千冬、そしてラファール・リバイブを纏った山田麻耶がいた。

千冬はバスターソードを弾き切っ先をサーシエスに向け

「もしまだやるつもりなら・・・私達が相手だ!」

その言葉で山田は両腕にアサルトライフルを展開しサーシエスに銃口を向ける。

「また邪魔すんのか・・・興が冷めた」

バスターソードを戻しサーシエスはそっくり残し去ろうとしたが、振り返って

「俺代表やんねーから。」

といってピッドに戻っていった。

そうして残ったのは、気絶したオルコット、織斑とissを纏った千冬、山田先生そして沈黙していた観客だけだった。

第5話「決着！・・・興が冷めた」（後書き）

どうでしたか？

今回はそんなに残酷ではなかったと思います。

それと皆さんは実剣とビームはどちらが好きですか？

お願いします！感想、アドバイスなどどんどん送って欲しいです！
戦闘描写は変ではないでしょうか？

第6話「試合後のご褒美？」（前書き）

連続投稿！

今回は唯衣が頑張ります

会話の時はその人の視点

戦闘時などは、第3者視点で書いていきます。

何か変なところがあれば指摘してください

第6話「試合後のご褒美？」

第6話「試合後のご褒美？」

「サーシェス」

「お帰り。サーシェス」

ピッドに着くと、唯衣が出迎えていた

「どうだった？あの二人は？」

「弱い。織斑はわかるが、代表候補生がああな程度だとは思わなかった」

「それは、サーシェスが強いだけよ」

と苦笑いしながら、言う唯衣

「そついや、お前IS乗るのか？」

「本当は乗りたくないけど・・・」

まあ、乗りたくないのは仕方がない。なら・・・

「なんなら俺がお前専用でMS作ってやろうか？」

「え？いいの？」

「別にいい。一応聞いとくが格闘と射撃はどちらが好きだ？」

「師匠と訓練したとき『おめえは射撃のほうに筋があるんじゃないか？』って言われたわ」

へえ、親父がそこまで言うんならそうなんだろうな。

「なら射撃型で機体を組むか。全身装甲でいいか？」

「ええ。」

「色とかどうする？」

「そうね・・・白とオレンジがいいかな」

「わかった。それじゃあ着替えるから待っててくれ」

「ええ」

く着替え中く

「待たせた。じゃあ行くか？」

そして進もうとしたとき唯衣が腕に抱きついてきた……は？

「唯衣さん？……一体何を」

「ん？今日勝ったご褒美♪」

そんな笑顔で言うなよ。ドキッとしたぞ。

「もしかして……嫌？」

「嫌じゃねえから行くぞ」

唯衣はスタイルがとてもいい。そのためどうしても腕に柔らかい物が……

そうして部屋に行くまでこの状態が続き唯衣は終始笑顔だった。

「それじゃあ寝んぞ」

「ええ。おやすみサーシエス。」

「おやすみ唯衣」

俺の意識は一瞬で眠りに着いた。

（唯衣）

布団に入った後私は眠れないでいた。

（どうして、あんなことしてんだろう・・・）

そう。私はなんでサーシエスにあんな事をしたか自分でもわからない
そしてチラッとサーシエスの寝ているベッドに視線を向ける。

トクンッ

心臓が跳ね上がるのがわかり、顔が赤に染まる。

（抱きしめてくれた時は・・・暖かったな・・・）

唯衣がサーシエスを意識し始めたのが、泣きそうになったときに抱
きしめてくれた時からだった。

サーシエスは口は悪いが容姿はカッコいいしなにより強い。

トクンツ、トクンツ

そう考えると心臓がまた跳ね上がりさつきよりも顔が真っ赤なのは自分でもわかる。

そこで私は気づいた

（私は・・・サーシエスのことが好きなんだ・・・）

その後恥ずかしさのあまり、布団を頭のでっぺんまで被り、寝たのだった。

第6話「試合後のご褒美？」（後書き）

今回は短かったな・・・

どうでしょう。唯衣がサーシェスに惚れたのに気づきました。これを書いている自分はとて2828しているでしょう。

それと原作キャラともう少しかかわったほうがいいでしょうか？

感想、アドバイスなど、どしどし送ってくれると嬉しいです。

第7話「代表決定！そして意外な展開！」（前書き）

今回も短いです！

これから、徐々に原作キャラとかかわらせて行こうと思います。

結構今回は無理やり感がありますが許してください

第7話「代表決定！そして意外な展開！」

第7話「代表決定！そして意外な展開！」

「サーシェス」

「では、一年一組代表は織斑一夏君に決定です。あ、一繋がりでない感じですね！」

教壇では山田先生がそう言い、席ではクラスメイトの女子達が盛り上がっている。

「先生、質問です。俺は昨日サーシェスにボコボコにされて負けたのに、何でクラス代表になってるんでしょうか？」

手を上げてそう聞く一夏に

「俺が辞退したからだ」

クラスが静まり返るが気にしない。

「なんで辞退したんだ。」

昨日あったことをもう忘れたのか？

「まず、俺とオルコットの試合に乱入してきた時点で、すでに試合じゃねえ。そしてお前は対戦相手にトラウマを植え付けたいのか？それはお前らが一番理解してるだろ？違いーか、オルコット、織斑。」

「「う」」

二人は痛いところをつかれる。・・・そして何人かが昨日のことを思い出して顔が青ざめている。

「まあ実際は、めんどくせえだけなんだけどな」

「さざっと、めんどくさいって言ったな！ー！」

クスクスッと笑い声が聞こえ、クラスの刺々しい空気もだいぶ軽くなった。

隣にいる唯衣の微笑んでいる姿を見て、かわいいと思ったのは秘密だ。

「うるさいぞ織斑。というわけでクラス代表は織斑一夏で依存はしないな？」

『はい！！！』

クラス全員が返事をする・・・よくそろうな・・・

「それではじゅ「千・・・じゃなかった織斑先生少しいいですか？」なんだ？」

織斑は俺のほうに近づいてきて

「サーシエス俺を鍛えてくれ！！」

と頭を下げて言ってきた・・・は？

クラス全員がポカーンとしている。隣の唯衣の方を向いたら、苦笑いしていた。

「なんで鍛える？」

「護るための力が欲しいのと・・・」

「と？」

「お前を・・・お前を倒すためだ!!!」

「・・・・・・・・」

これにはさすがの織斑先生もポカーンとしている

やべ・・・耐えられネエ・・・

「フッフ・・・」

「？」

「ハハハハハハ!!!!!!」

俺が笑い出したことにビククリする生徒達・・・
なぜそんなにビククリする・・・

「俺を倒すために、俺に鍛えて欲しいか・・・別にいいが」

「が？」

「まずは、篠ノ之、オルコットに基礎知識などを教えてもらえ、それである程度できるようになったら俺が模擬戦をやってやる。お前は体で覚えそうなタイプだからな」

「ありがとう！セシリア、箒、俺に放課後教えてくれ、頼む！」

「私がかまわないが・・・」

「私がかまいませんが・・・」

二人はバチバチと火花を散らせながら、睨み合っている。

（ほほう）

そこで俺は気づき、唯衣に小声で話しかける。

（唯衣）

（どうしたの？）

（あの二人織斑のことが好きみたいだぞ）

（本当。一夏も罪作りの男だね？）

（まったくだ。）

俺たちはこんな話をしながら、その光景を笑いながら見ていた。

かくして、一夏（これからそう呼ぶ）が俺の弟子？になった。

第7話「代表決定！そして意外な展開！」（後書き）

いかがでしたか？

次回は転校生が来ますよ！！

感想、アドバイスなどしどし送ってください！

第8話「さわがしい転校生とクラス対抗戦そして乱入者」(前書き)

投稿！

大分飛ばし飛ばしです。

それとこれからは苗字ではなくキャラの名前を呼ぼうと思います

第8話「さわがしい転校生とクラス対抗戦そして乱入者」

第8話「さわがしい転校生とクラス対抗戦そして乱入者」

「というわけでっ！織斑くんクラス代表決定おめでとう！」

「「「「「おめでとう！！」「」「」」」」

夕食後の自由時間。

食堂を貸し切って、「織斑一夏クラス代表就任パーティー」が行われている。

一夏は即席のパーティー会場の中心で、クラスメイトたちから口々に祝いの言葉を贈られている。

全くめでたくない顔の一夏だが、女子に囲まれているその姿が、箒には気に入らないようだ。

俺は少し離れたところで唯衣と二人で見ていた。

「はいはい、新聞部です。話題の新生、織斑一夏君とアリアル・サーシエス君に特別インタビューをしましたっ！」

「は？」

オーと盛り上がる一同。

代表になった一夏ならまだしも、なぜ俺まで？

「あ、私は二年の黛薫子。よろしくね。新聞部副部長やってまーす。はいこれ名刺」

「あ、どうも」

「ではではずばり織斑君！クラス代表になった感想を、どうぞ！」

「えーと……」

「一夏がまともな感想をいえるのか？」

「まあ、なんというか、がんばります」

「えー、もっといいコメントちょうだいよ。俺に触るとヤケドするぜ、とか！」

もうコイツはまともな感想いえねーな

「自分、不器用ですから」

「うわ、前時代的！」

黛さんあんたの台詞も相当に前時代的だと思う。

「じゃあまあ、適当に捏造しておくからいいとして……ああ、リアル君もコメント頂戴」

と俺に近づいてくる。周りも俺が何を言うのかわくわくしている。

唯衣も期待を込めた目でこちらを見ている

「あー、あんま期待すんなよ？」

「あれだっ たら捏造するから大丈夫」

目を瞑り考える

「あんまし俺をなめてると・・・死ぬぜ？」

そして沈黙

（あれ？コメント過激すぎか？）

サーシエスは気づいていないのだろうか？容姿は美形、そして実力もかねそろえている。

コメントは過激だが、サーシエスが言うとうつも似合い、さらにかっこよく見える。

女子生徒はもちろん、新聞部副部長、サーシエスが嫌いな篤やセシリアでさえも顔を赤くする

唯衣にいたっては、サーシエスに熱い視線を送っていた。

「きゃあああああああああああ！！！！！！！！！！！」

「」

黄色い歓声が上がる。

「少し過激だったけど、大丈夫か？」

「ええ、どこも問題ないわ!!」

少し興奮している、黛先輩。

その後は専用機もちでの撮影のはずがみんなが写るといふ物になってしまった。

唯衣はこれを気にもっとサーシエスに惚れていったのだった。

↓翌日教室↓

「そついや、今日転校生が来るとか騒いでたな」

「たしかにそうね」

現在教室に向かっていているんだが、なぜにまた腕を抱かれているんだろっ？

不思議と嫌ではないが、周りからの視線が痛い。

「ん？」

教室の前に行くとちっこい女が立っていた。はっきり言って邪魔だ。

「おい、そのチビ。どけ邪魔だ」

「誰がチビですって!!」

あつ、こいつ終わったな。

「おい」

「今度は何「バシン!!」へぶつ!」

相変わらず織斑先生の奴は痛そうだ。

「もうSHRの時間だ。そして道を塞ぐな邪魔だ」

「げっ千冬さん」

「織斑先生だ。早くもどれ」

「一夏!また後で来るからね!待ってなさいよ!」

と教室を出て行ったチビは横切るとき俺を睨んできたが無視した。

そして教室に入ると、セシリアと箒が叩かっていた。

その後一夏からあのチビの名前を聞いた。チビの名は「鳳 鈴音」
転校生で2組のクラス代表だそうだ。

そして、1週間がたち、クラス対抗戦が今、行われようとしていた。

『両者は規定の位置についてください』

モニタールームでは俺、唯衣、箒、セシリア、織斑先生、山田先生が試合を見ていた。

一夏は危ない動きで回避をしながら攻撃をしている。

「ねえ。おサーシェスからみて一夏は成長したの？」

「前より回避するのがうまくなっただけで俺と戦うにはまだ無理だ」

「そうなんだ」

と唯衣と会話していると

「何だあれは？…一夏が吹っ飛んだぞ」

「衝撃砲ですわね」

「衝撃砲？」

「空間自体に圧力をかけて砲弾を打ち出す武器です」

「ブルー・ティアーズと同じ第3世代兵器ですわ」

と山田先生、セシリアが説明してくれる

第は心配そうにモニターに映る一夏を見つめるだけだ。

一夏は立ち上がり、覚悟を決めた瞳を鈴に向け、隙を突き瞬時加速で一気に距離を詰めるが接触する直前、二人の間に遮断シールドを破り何かが爆音をたて落ちて来た。
その瞬間に織斑先生が指示を出した

『試合中止！織斑、鳳、直ちに退避しろ！！』

そして砂塵が晴れ中から出てきたのは、人よりもでかい全身装甲のISだった。

第8話「さわがしい転校生とクラス対抗戦そして乱入者」(後書き)

いかがでしたか？

感想、アドバイス、悪い点などとしどし送ってください。

次回は少しぐろいです。

お楽しみに〜

第9話「戦いの代償前編」（前書き）

今回は長くなりそうなので前後半に分けました

それでは・・・どぞ

第9話「戦いの代償前編」

第8話「戦いの代償前編」

「モニタールーム」

『山田先生。一夏と鳳に回線つなげられるか?』

「あ、はい。」

とコンピュータを叩き一夏に回線をつないだ。

「一夏、鳳そっちの状況はどうだ?」

回線をつないだが・・・なぜ一夏は鳳をお姫様だっこしてるんだ?

『サーシェスか!・・・敵はやるきみたいだ。』

『ちょっと!あんななんなのよ!』

「そんなのは後で説明してやる。それよりお前らのシールドエネルギーはいくら残ってる?」

『俺は100ぐらい』

『私は200ちょっとのこってるわ』

「お前達はそいつと戦うつもりか？」

『ああ。俺たちが戦わなかったら、もつと被害が出るからな』

『私もよ。教師達が来るまでの時間稼ぎぐらいなら出来るわ』

「アリアル君！そんな勝手に「今の事態がわからないのか？」え？」

「一夏、鳳よく聞け、今アリーナのシステムが掌握されているのがわかった。それで教師部隊も着くのが遅くなるだろう。」

その言葉で一同が驚く。

「だが、お前ら二人で時間を稼げ。俺がなるべく早くそっちに向かう。いけるか？」

『おう！／わかったわ！』

と言って回線を切る。

「山田先生。もう少し落ち着いて事態を把握してください」

「す、すみません」

「織斑先生。アリーナに向かってよろしいでしょうか？」

「ああ。かまわん。アリアル・・・二人を頼んだぞ」

「任せろ。それじゃあ唯衣行ってくる。」

「気をつけてね」

「おう！」

といってモニタールームを出て俺は考えていた。

（なぜアイツは俺たちが通信をしているときに攻撃してこなかったんだ？ いや違うか、会話自体に興味があったのか？ 何にせよいそがねえと）

その後扉などの障害があつたが、バスターソードを生身でもって扉を破壊しながらアリーナに向かった。

アリーナに着くと、一夏が全身装甲のISの右腕を叩き切っている所だった。

そして左腕に殴られ吹っ飛ぶ。

「（そろそろ行くか）アルケー！」

俺はアルケーを出し、アリーナのシールドをバスターソードで切り裂き、全身装甲に向かって瞬時加速で接近し、バスターソードで真つ二つにした。

「まだまだ、甘めえな一夏。」

「悪いな、サーシェス」

第9話「戦いの代償前編」(後書き)

いかがでしたか？

すこし雑ですいません。

次回は少しグロくなります

感想、アドバイスなどどしどし送ってください！

第10話「戦いの代償後編」(前書き)

投稿！そして少しグロイです

ゆっくり見ていってください！

第10話「戦いの代償後編」

第10話「戦いの代償後編」

「サーシエス」

「な・・・そんな!？」

「うそ・・・でしょ・・・」

その場にいた、一夏、鳳は絶句する。

自分達が捨て身でもしないと倒せないISが5機もやってきた。
そして極み付けは

「白騎士・・・」

一夏は呟いた。それはISの元になった機体。日本に向かって発射された2314発のミサイルを破壊した英雄。その機体もそろい誰もが絶望の中、

「謎のISが5機と白騎士・・・殺しがいるってもんよ!!」
「」

サーシエスだけは違った。

俺はモニタールームに通信を繋いだ。

「織斑先生。教師陣をアリーナに入れるな」

『なんだと！まさかお前らだけで戦うつもりか！！』

この人は何を勘違いしているんだ？

「何を言ってるんですか？」

『どういう事だ？』

「俺一人が戦うに決まってるんだろ」

『「！？」』

その言葉に驚くがすぐに反論が飛んでくる。

「あんた、あいつらと1人でやり合うつもりなの？！」

「サーシェスいくらなんでもおまえ一人じゃ・・・」

「そうですね！私達も加勢しますわ！」

そこにオルコットまで入ってくる。

「俺は久々に暴れたいんだよ・・・そこに足手まといのお前らがいるのは邪魔なんだよ。だから黙って安全なところで見てろ」

「くっ」

「わかつたら、さつさとどけ」

それに言い返せるものは居なかった。
しぶしぶ離れていく3人。横切る一夏に俺は言った

「一夏、・・・」

「何だよ」

「俺の戦いをよく見てろよ」

「・・・ああ」

そして安全なところまで下がった

「さぁ・・・戦争を始めようぜ!」

俺は、バインダーを開き

「行けよ!ファング!!」

10機のファングを展開すると、5機の内2体が突っ込んでくる。
その片方に、すべてのファングを向かわせる。俺はもう一体に突っ込む。

ファングは個々がありえないような・・・生物のような動きをしながら、確実にビームを当てていく。
すると突然ファングが一箇所に集まった。それを見逃さなかった、敵ISはそこに向かってビームを放った・・・だがこれがいけなかった。ファングは散解し、そのビームを避け、隙ができた敵ISに

ビームサーベルを展開して突き刺さる。

『!!!!!!??.?』

ファングは腕、足、胸、頭、至る所に突き刺さり、敵の機能を停止したi sはそのまま落下。地面に着くと同時に爆発した。

サーシエスはスピードを落とさずにビームを避けながら、近づいていく。スピードは落ちるところかさらに上がり一瞬で、間合いに入った。敵i sは急いで右腕で殴ろうとするが

「ところがギッチョン！」

両爪先から展開されたビームサーベルで右腕を肩の部分から切断。斬られた事で体勢を崩した敵i sの左腕もためらいなく足のビームサーベルで切断。そしてバスターソードを振りかぶり

「ちょいさー！」

頭を目掛けバスターソード振り、縦一線に両断した。

この間わずか10秒。サーシエスの周りにはファングが浮いている。それは合図を待つ猟犬のように
そして残りの3体のi sと白騎士にバスターソードの切っ先を向け
言う

「小便は済んだか？神に祈りは？部屋の隅でガタガタ震えて命乞い
する心の準備はOK？」

その姿は紅の衣を纏った地獄の死神のように見えた……

く一夏・鳳・セシリアく

「そんな・・・私達が苦勞した相手を一瞬で・・・」

「ビットが10機も・・・しかも何ですのあのビットの動きは！」

「もしかして・・・俺たちは手加減されてたのか？」

わずか10秒で一夏達が苦勞して倒した敵を2機も破壊した。さらにいつも6機しか出していないが今回は10機すべてのファングを使い、いつもとは全然動きが違うファングを見ると、それは手加減されていたと認識するには、十分なものだった。

「よく見てないとな・・・」

その戦いを参考にしようとして一夏は黙って戦いに目を向けた。

くサーシエスく

「行けっ！ファング！！」

ファングを敵issには6機、白騎士には4機ずつ分けて放つ。敵issは苦戦していたが、白騎士に向けたファングは一発も当たることなく、すべて破壊された。白騎士は俺に近づいてくる

「さすがに強えーな！白騎士！！！！」

そして剣とバスターソードのぶつかり合う。白騎士の姿を見ると
徐々に怒りがこみ上げてきやがる。

それからは何度も剣とバスターソードのぶつかり合い、この時、違和感にきずく。

（あ？フアングを操っている感覚がねえ・・・まさか！）

気づいたときには遅かった。白騎士が突然離れたと思ったら、その後ろには2機の敵ISが腕のビーム砲をフルバーストモードに変更していた。1機は倒せたがもう2機は倒せなかったようだ。その2機はエネルギーを限界以上まで溜めているのか、火花や紫電が飛び散っている。そしてサーシエスに向けて放たれた。

「ちっ！」

即座に左腕のシールドを展開し、ビームを受け止める。がビームの威力が強すぎて徐々に押されめ・・・そして等々耐えられなくなりシールドが爆発。それと同時に2機の敵ISが爆発する。爆発で顔がむき出しになり、視界が悪くなっている。そしてそれを好機と見た白騎士は瞬時加速で一気に近づく。

「しまっ！」

いくらサーシエスでも、これには反応ができなかった。そして・・・

ザシュッ！！

ブシャアアアア！！

左腕が肩から叩き斬られ、血が吹き出るが

「ぐっ！こなくそがあああ！！！！！」

すかさず足のビームサーベルを展開し、白騎士の左腕を斬る。
白騎士は距離を開ける。

「ハア、ハア・・・」

斬られた左腕からは絶え間なく血が溢れている。

（くそ・・・目が霞みやがる・・・あれを使うしかねえーか・・・
）

そして決心してそのシステムの名を叫ぶ。

「TRANS - AM！！」

（一夏・鳳・セシリア）

「サーシエス！！」

「ねえ！ちよつと！あいつ左腕切られたわよ！？」

「よく・・・意識を保てて居られますわね・・・」

一夏達は心配しているが、鳳・セシリアにいたっては顔を真っ青に

している。

「ん？何か飛んでくるぞ？」

一夏の先には紅い何かが近づいてくる。そして

ガシャアア！

ドガアアン！！

それは一夏の後方に落ちた。そこにはサーシエスの斬られた左腕が落ちて、さらに爆発した。

一夏たちに血が掛かる、一夏は顔が真っ青になるが

「「いやああああ！！！！・・・きゆう」」

「お、おい！二人とも・・・気絶してるし」

あまりの物に気を失った、二人。

二人を抱えながら、戦いに視線を戻すと

『TRANS - AM！！』

とサーシエスが言うと。

「装甲が紅く光ってる・・・」

そこにはさらに装甲が紅くなった、サーシエスだった。

「サーシエス」

「一瞬で潰してやる！」

白騎士に一瞬で近づき、切り裂く。それを繰り返しながら上に上昇していく。

『！！？？』

あまりの速さに反応できない白騎士は斬られるがまま。そしてうえに打ち上げられると、足のビームサーベルとバスターソードで残りの四肢を切り裂く。そして白騎士の腹にバスターソードを刺し貫通させるとそのまま地面に向かって、突き進む。そして……

ドゴオオオン！！

そのまま地面に激突、そこにはクレーターができていてその中には、機体がボロボロで火花が散っているアルケーとボロボロになった白騎士だった。それに目をむけて言った

「へっ……ざまあ見や……が……れ」

バタッ！

そして、アルケーが強制解除され、倒れるサーシエス。すると後頭部に暖かいものを感じ目を開けると。

サーシエスの頭を膝に乗せ、泣いている唯衣。そしてこちらに向かってくる織斑先生、山田先生、一夏、箒、鳳、セシリアが目に入っ

た。

そこで俺の意識は落ちた。

第10話「戦いの代償後編」(後書き)

いかがでしたか？

今回はヘルシングのセリフが入りました。
みなさんわかりますよね？

それとさすがに一回も負けないと言っのは、嫌いなのでこっぴどい形になりました。

何か問題があったら、言ってください。

感想、アドバイス、どしどし送ってください！！

第11話「互いの気持ち」（前書き）

連続投稿！！

今回はべたです。はい

それとサーシエスの機体には絶対防御がありません。

第11話「互いの気持ち」

第11話「互いの気持ち」

「サーシエス」

「・・・知らない天井だ」

俺は体を起こし、あたりを見渡す。見慣れない所からIS学園ではない事がわかる。消毒液の独特な匂いがすることから病院だと言うのはわかった。そして左腕の感覚がない。

「あの時、左腕切られたんだっけな」

切れ口をさわる。まさか、もう使う羽目になるとはな・・・

「む、目覚めたか。」

扉のほうに向くと千冬がいた。

「お前の機体破損レベルはDだ。それと左腕だが・・・」

「それについては分かっています。千冬少し頼んでいいでしょうか

「？」

「なんだ？それと織斑先生だ」

「今は学校じゃねえーから別にいいだろ。頼みつてのは俺の部屋にあるパソコンを今すぐに持ってきてねーか？」

「ああ。なら一夏たちに持ってこさせるように指示を出そう」

「すまねえな」

（それから数時間後）

ガラガラ

「おう来た「サーシエス！」ごぶ！」

扉を開けるなり、いきなり抱きついてくる唯衣

「心配したんだよ・・・」

「ああ。心配かけてすまなかったな。」

頭を撫でながら言う。すると扉から一夏、箒、セシリア、鳳、千冬が入ってきた。

「「サーシエス！大丈夫か！？」」

と一夏と箒

「私もさすがに心配しましたわよ！」

とセシリア

「あんた、結局ケガしてるじゃない！」

と鳳

「お前らも悪かったな」

と一応頭を下げた。

「それでパソコンを持ってこさせた理由はなんだ？」

「今見せっから待ってる。一夏パソコン机の上に置いてくれ」

「おう」

と机に置かれたパソコンを開き、キーボードを叩いていく。

ガシャン

「「「「「！！！！」」」」」

すると画面から腕のようなものが出てきた。

「ふうゝこんなに早く使うはめになるとはな……」

「アリアル・・・それは義手か？」

「ああ。この前言つたる俺は傭兵だつて。もしかしたら腕とかなくなるかもしれないから一応作っておいたが・・・まさかもう使うはめになるとは思わなかった・・・一夏、義手を切り口に近づけてくんねーか？」

「あ、ああ。」

とコンピュータを叩きながら調整する。すると力チャットと言つ音と共に、義手が装着された

「よし！これでいいな」

「なあ？でもすぐに壊れたりしないか？」

当たり前前の質問だな

「その変は大丈夫だ。この義手はEカーボンっていう素材で出来ててな、ISの武器にも余裕で耐えるし、水の中に入れても大丈夫だ。ちなみにこの素材は俺の機体にも使われてんぞ」

俺は腕を動かしながら答える。よし違和感はないな。

おい、なんで千冬と唯衣以外「お前つてやつぱ規格外だな」みたいな視線を向けやがる・・・

「千冬、お前の出席簿Eカーボンで新しく作つてやるうか？」

「む、いいのか？」

「ああ。どつかのバカ共が失礼な事考えたからな。その罰だ。それに叩く時の威力が上がるぞ」

「「「それだけはやめてください!!!」」」

「え?やだ。千冬できるのは3日後だけどいいか?」

「ああ。かまわんよ」

「「「最悪だ————!!!」」」

「それから数時間後」

「それでは私達は帰る。」

「あれ、唯衣は?」

「唯衣はいいのよ!あんたほんと鈍いわね!」

「まったくですわ!唯衣さんゆっくり二人で話してきてくださいまし」

「一夏いいから帰るぞ!!」

「ってちよつと待て!引つ張るな!」

と3人に引つ張られながら、部屋を出て行った一夏

「唯衣。今回は送れて来ても見逃そう。ではな」

「はい。ありがとうございます」

と千冬も部屋を出て行った。

「唯衣。話つてのはなんだ？」

「うん。ねえサーシエス。初めて会った日の事覚えてる？」

「ああ。色々話して、泣きそうになったお前を……抱きしめた
／／／」

「そう／／／。それからね、少しずつねあなたの事が気になり始めて……今回の事件であなたが怪我をした時にすごく心配だった。そこで私は薄々そうではないかと思ってた自分の思いに確信したを持てたの。……私はアリアル・サーシエスが好きです／／／」

状況整理だ……。なぜにこうなった。もしかして話はこれだったのか！？

はあゝまさか唯衣から告白されるとは……。答えは決まっているが

「唯衣」

「なに……。ンム！？」

俺は唯衣を抱き寄せて、短いキスをする。そして唇を離し

「俺もお前のことが好きだ／／／」

我ながら恥ずかしいことをしたもんだ

「サーシエス・・・そのもう一回キスして／＼」

「ああ。何回でもしてやるよ」

そして二人は唇を合わせた。それはさっきよりも長く、深く続いていった。

今、紅き傭兵は愛する人、篁唯依と繋がったのであった。

第11話「互いの気持ち」（後書き）

いかがでしたか？

サーシェスと唯衣がついに、結ばれました！！！！

後半書いているときニヤニヤしながら書いていたのに気づいた。

リア充なんて・・・もげて爆発してしまえ！！！！

感想、アドバイス等としどし送ってください。

第12話「機体の製作&改造DA!」(前書き)

投稿!!

機体を改造します。

それとあの丸いやつがです!!

第12話「機体の製作&改造DA!」

第12話「機体の製作&改造DA!」

くサーシエスく

唯衣と結ばれて3日後、i s 学園の整備室で機体の状態を確認している。唯衣は箒、セシリア、鈴（そうよべと言われた）と女の話があるそうだ。

「左腕の破損にフアング全機と左腕の大破。機体全体に亀裂・・・改造しねえとな。それと唯衣の機体もある・・・ハ口!」

「ドウシタ!、ドウシタ!」

こいつ最近作ったハ口と言うロボット、形は丸い。こいつは情報の処理能力などが高く機体、兵器開発はもちろんのこと、教師のデスクを助ける事もできる。ちなみに色は紅だ。

「唯衣の機体の調整を任せれるか?」

「マカセロ!、マカセロ!」

「そんじゃ機体の改良始めますかね」

く女子ズく

一方その頃箒の部屋にて、唯衣、箒、セシリア、鈴達はこのような話をしていた。一夏は家に帰ったのでいないとの事。

箒「唯衣、単刀直入に聞くぞ。・・・成功したのか？」

唯「直球すぎるね・・・うん。うまくいったよ」

鈴「それでどこまでやったのよ！」

唯「えつと・・・キスまで／＼／＼」

セシ「キスもしたんですか！？うらやましいですわ・・・」

唯「私の事もいいけど、そっちの3人好きな人がいるんでしょ？」

「「「いや、私は別に一夏の事なんか・・・」」」

唯「あれ、私がいつ一夏っていたかしら？」

「「「う～～／＼／」」」

唯衣に見事に鎌を掛けられていた。

「サーシエス」

「各部異常なし・・・こんなもんか」

そこには明らかに重装備のアルケーがいた。間接が黒に染まり、腰の両側についていたバインダーの大型化、そして新たに後ろ側にもおなじような物が付き、背中には左側にバスターソードが2本、右側にはランチャーが付いて、GNコアは足の部分に2つ付いている。あきらかに1対多数の機体になっている。

「名前は……ヤークトアルケーでいいな」

「サーシエス、デキタ！デキタ！」

「出来たか、ハロ！見せてくれ」

とハロが出した画面を見ると、その機体はライフルを右肩に腰には2丁のサブマシンガンそして機体の色は白と深緑。ヘッドにはスコップが付いていていかにも射撃に特化した機体だとわかる。この機体にもGNコアが1つ使われている。

「へえ〜ケルデイルって言うのか」

「イイナマエ！イイナマエ！」

「確かにいい名前だ。後はこれを唯衣に渡して……」

とハロと待機形態のアルケーとケルデイルを持って部屋から出ようとしたが、

「あ！……出席簿作んの忘れてた」

余計な事を思い出したサーシエスは30分でオリジナル出席簿Vr千冬を作って、今度こそ整備室からでた。

だがサーシエスは気づいていなかった。その作業をずっと見ていた物を。

くMYルームく

ガチャ

「お帰り、サーシエス」

「ただいま、唯衣。唯衣これ受け取れ」

待機形態のケルデймを渡す。

「これは？」

「お前の機体の待機形態だ。その機体の名前はケルデйм、遠距離特化の機体だ。」

「ケルデйм……」

「気に入ってくれたか？」

「ええ。ありがとうサーシエス!!」

と抱きついてくる。あれ？唯衣ってこんなキャラだったのか？

その後、ハ口を大層気に入ったようで1体作る事になった。

第12話「機体の製作&改造DA!」(後書き)

いかがでしたか？

次は機体設定だと思います。

それと感想、アドバイスをください!!

機体設定2 ネタバレあり(前書き)

最近、サーシエス感がなくなっていることに気づいた。

それで、戦闘時、怒り時にサーシエス化すると考えたのですがどうでしょうか？

機体設定2 ネタバレあり

機体設定2

機体名 ヤークトアルケー

待機形態は変わらず

搭乗者 アリアル・サーシェス

新システム

ツインコアシステム

2つのGNコアを同調させる事で、機体出力を爆発的に向上させるシステム

特徴

この機体は1対多数向けの機体
腰部には追加アーマーが装着。また、両脚部には武装やGNステルスフィールド発生機能などを搭載したGNコンテナを装着。あまりの重装備で機動力が落ちていたが、ツインコアシステムで問題が解決。逆に機動力が向上した。

〈武装〉

GNランチャー

GNバスターソード×2

GNビームサーベル×2

GNフング×12

GNミサイル×12

特殊機能

GNステルスフィールド

GNコンテナに搭載されている機能で、コンテナからGN粒子を広域に最大散布し、レーダーなどを無効化する巨大なジャミングフィールドを形成する。

TRANS - AMシステム

ツインコアシステムにより、使用時間が1時間になりさらに機体性能が下がらなくなった（粒子化するかは考え中）

オリジナル設定で腰部の追加アーマーにGNミサイルを搭載している。

機体名 ケルディム

待機形態 深緑のネックレス（形はソレスタル・ビーイングのマーク）

操縦者 篁 唯依

特徴

本機は射撃戦をメインとする機体であるが、それが更に徹底されており、格闘戦用のビームサーベルも廃した。GNドライブは腰部後方に外装された。TRANS-AMシステムも使用可能で、その際にはバックパックから精密射撃用のフォロスクリーンが展開され、命中精度を向上させる事が出来る。

（武装）

GNビームピストルII

背部に2挺マウントされているビーム拳銃。中・近距離戦闘時の主力武装。なお先述の通り本機はビームサーベルが廃されたため、近接戦闘のために銃身の下部に対ビームコーティング処理が施されている。これによって敵機のビームサーベルを受け止めたり、格闘戦用の斧としても使えるようになっていた。

GNスナイパーライフルII

長距離狙撃時の主力武装で、威力と射程に優れている。不使用時は二つに折りたたんで右肩に装着する。また、折り畳んだ状態で「3連バルカンモード」としても使用可能。

GNミサイルポッド

腰部に4基内蔵されている実弾兵装。1基につき2発、計8発のG

Nミサイルを搭載している。

GNシールドビット

機体各部に9基が装着されており、機体から分離して展開し、全方位の敵の攻撃から自分や味方機を守る。ビット同士を合体させる事で有効防御面を拡大させる事も可能。また、小型ビーム砲を各1門内蔵しており、攻撃にも使用できる。さらに、4基1組で高出力ビームを放つ「アサルトモード」と呼ばれる機能も存在する。

特殊機能

TRANS-AMシステム

機体各部のGNコンデンサー内に蓄積している高濃度圧縮粒子を全面開放する事で機体性能を通常の3倍以上に引き上げるといった。ただし、限界時間があるうえ、使用後はしばらく性能が大幅にダウンしてしまうという短所もある。

だがこの機体はそれを克服している

フォロスクリーン

バックパックに格納されている精密射撃用の装備。あらゆる情報を高速で計算し、搭乗者に伝える。その正確なデータと高確率の事象予測から、命中精度は極めて高くトランザム起動時にのみ使用可能。

これはすべてガンダムwikiを参照。

機体設定2 ネタバレあり（後書き）

・・・どチートになりました。

ご都合主義全開です。

次回はあの二人が!?!?!?

感想、アドバイス、よろしくお願いします。

第13話「転校生は男!?!?!?」(前書き)

今言っておきます。

ずっとサーシエスのような事をしているとクラスに馴染めなさそうなので、生活面では零斗。戦闘時などサーシエス化する事にしました。なのでコメディイが入ります。

なにかあればご指摘願います。

第13話「転校生は男！？・・・なのか？」

第13話「転校生は男！？・・・なのか？」

「サーシエス」

「えーとつ、転校生を紹介しますね。入ってきてください！」

転校生ね・・・最近多くないか？

「シャルル・デュノアです。

こちらに同じ境遇の方がいるので転校してきました
みなさんよろしくお願いします。」

ニコツと微笑むデュノア。唯衣と先生二人を除いて女子生徒は顔を
紅くしていた。

その笑顔を見てドキッとした瞬間、隣から殺気が籠った視線を向け
られたのは気のせいだろうか。

そしてこいつは本当に・・・男か？

だが・・・

「ラウラ・ボーデビツヒだ」

「えっそれだけですか？」

「以上だ」

冷めた、一瞬でクラスの空気が冷めたのがわかる。

「貴様が！」

そして一夏に憎しみの籠った目線が向けられる。
さすがに見過ごせねえな・・・お、そうだ

そして一夏の前にボーデビツヒが立つと同時に懐に入れえておいた物を取り出し

バツシイイン！！

「ぶはっ！」

一夏の頭を特製出席簿で叩く。あまりに強かったのかそのまま机に突っ伏した。

ボーデビツヒは腕を振り上げた状態で固まっている。
従来よりも威力が7倍上がってるな。

「織斑先生。最終テストが終わったので受け取ってくれ」

「すまないな」

「俺をテスターにするな！！！！」

「復活早えーな！オイ」

俺は一夏をからかいながら、ボーデビツヒに目を向けると俺を睨み

「ふんっ」

すたすたと自分の席に座って目を閉じた。
そんな子犬みてーな殺気は怖くねえんだよ

「ではHRを終了する。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦を行う。解散！それと織斑とアリアルでデュノアの面倒を見る。」

その言葉で俺と一夏は席を立ち

「一夏。早く行くぞ」

「ああ」

とデュノアの手を掴む一夏。デュノアよ。なぜ顔を赤くする。
お前は本当に男か？

「女子は教室で着替えるから男子は空いてるアリーナの更衣室で着替え

移動の度にこれだから早めに慣れろ。いいな」

「う、うん」

すると前方から

「転校生発見！

ついでに二人もいるよ！」

「者共！出会え、出会え！」

ざっと囲まれてしまう。しゃあねえ・・・

「一夏、デュノア、・・・あとガンバ」

「は？どういう・・・」

一夏は固まった。いやその場にいる全員が。なぜなら・・・

「よつと！」

助走なしで跳躍しそのまま女子の上を跳び越したからだ。
自分でも思うが・・・でたらめだな。

「そんじゃ、お先」

後ろで何か言ってるがキコエナイ、キコエナイ

くグランドく

俺はISを着なくてもいいので制服のままだ。
それから少し遅れてきた男子二人は・・・
俺特製出席簿の餌食になった。

デュノアには、

バッシ！と易しめではあるが

一夏には・・・

バシィィィン!!

さっきよりも強く叩かれていた。それを見て顔を青ざめる生徒達
織斑先生! 気づいてくれ!! 一夏の口から白いものが出る!!!

一夏はその後脅威の速さで復活した。・・・あいつ人間か? (お
まえが言うな!)

第13話「転校生は男!?・・・なのか?」(後書き)

どうでしたか?あまりにも変わってしまいましたが、戦闘時は残虐になるので大丈夫です!(手加減しているときはそこまで怖くわないと思います)

次回は機体のお披露目フルボッコです!!

感想、アドバイスどしどし送ってください!!

第14話「お披露目&瞬殺」(前書き)

どうでもいいですが……親と喧嘩しましたw

受験なのにいつまでパソコンしてんの！と言われ反抗したら、
勝手にしなさい！と没収されていたPSPが返却された！！(^
 ^) V

現在10才、オタクロードを爆走中！！！！

唯衣の機体はまだ出しません！

第14話「お披露目&瞬殺」

第14話「お披露目&瞬殺」

「サーシエス」

「何かと言うとすぐにポンポンと人の頭を・・・」

「・・・一夏のせい一夏のせい一夏のせい・・・」

頭を摩りながら、文句を言う鈴とセシリア。

千冬の前で喋るという勇者行為をしたため、二人の頭に魔王の一撃が落ちた。

叩かれた二人の口から、白い物が出ていた。・・・作ってよかったのか？

「今日は戦闘を実演してもらおう。ちょうど活力が溢れんばかりの十代女子がいることだしな。・・・凰！オルコット！」

「なぜわたくしまで！？」

「専用機持ちはすぐにはじめられるからだ。いいから前に出る」

「だからってどうしてわたくしが……」

「一夏のせいなのになんでアタシが……」

ぼやきながら前に出る二人に、千冬が耳元で囁くと二人の目が光った。

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね！専用機持ちの！」

あー、大方一夏関係の事を言っただんな。

「あああーっ！ど、どいてくださいっ！」

と声とともに何かが一夏にぶつかった。

煙が晴れると……山田先生を押し倒して胸を揉んでいた。……ハ？

ソレをみた鈴とセシリアは額に青い筋を浮かべ、レーザーライフル、双天牙月を一夏に向けて

放った。セシリアの攻撃は避けたが、鈴の攻撃は……無理だなw

一夏……ドンマイ。と思っていると、

「ハッ！」

山田先生が放った2発の弾で武器が弾かれた。
そんな姿を生徒は啞然として見ている。

「山田先生はああ見えて元代表候補生だからな。今のくらいの射撃は造作もない」

「む、昔のことですよ。それに候補生止まりでしたし……」

こんな人でも代表候補生が務まるのか……（失礼です）

代表候補生3人ねえ……。おつ、機体の性能をチェックするには
ちょうどいいな。

「それでは「織斑先生。ちょいといいですか？」……なんだ？」

「俺の機体完成したんで、腕試しにその3人と試合していいか？」

「ふむ。……。それもおもしろそだ。許可しよう」

「あんがとさん」

許可もとれたし準備すつか。

そしてアルケーを展開

へえーごつつい割にはそこまでおもくねえーな。（サーシエススイ
ツチON）

周りから視線を感じる

「おい。なんか変か？」

「いやいや！お前なんだよその装備！改造しすぎじゃね！？」

一夏が言つと周りがうなづく・・・そんなに改造したか？

「オホン。それでは準備しろ」

その言葉で4人は空に上がった。

く一夏く

「ねえ、一夏。サーシエスの機体・・・大丈夫なの？」

「さあ？」

シャルルが心配するのわかる。前よりごっつくなりすぎて機動性が大丈夫なのか心配なぐらいだ。

だがその心配は杞憂に終わった。

『それでは・・・始め！』

千冬姉の合図と同時に鈴、セシリア、山田先生が落ちてきた・・・ハ？

周りを見ると、千冬姉までもがポカーンとしていた。

いったい何をしたんだ？…………

「サーシエス」

「3対1なんてずいぶんなめてくれるじゃない」

「いくらあなたが強くても無理ですわ！」

「怪我をしないでくださいね」

いや、3人でもたぶんたりねえーと思うんだが…………

「おい。絶対に目を逸らすな、感覚も限界まで研ぎ澄ませ。でねえとなあ…………」

俺は背中 of 2本のバスターソードを抜きながら言う

「一瞬で散るぜ！」

『それでは…………始め！』

開始の合図と同時に間合いを詰めバスターソードで3人とすれ違うようにして斬った。

すると3人が地面に向かって落ちていく…………は？

「おいおい！手ごたえがなさ過ぎるぜ！！」

するとアルケーから情報が流れてきた。

『3体のi sのシールドエネルギーエンプティーを確認。』

（改造したはいいが・・・いくらなんでも、やばくねえか？）

地面に降下しながら、そんな事を考えていた。

授業が終わると、質問攻めにあつたのは無理もない。

第14話「お披露目&瞬殺」（後書き）

どうでしたか？

少し雑ですが、アルケー無双しました。

感想、アドバイス、どしどし送ってください

『**真実**』（前書き）

今回は本編であまり憎しみが現せられなかったので

それを現しました。

でも本編がどうなるかわかりません。

『真実』

『真実』

俺はいつまでこんな茶番を続けないといけねえんだ？

俺を捨てた親を殺すまでか？

違げえ

篠ノ之 束を殺すまでか？

違げえ

白騎士・・・織斑千冬を殺すまでか？

違げえ

i sをすべて壊すまでか？

どれも違ええ。

俺はこの世界すべてに復讐してやる

俺には友も親友も恋人もいらねえ。

だが俺の復讐のために必要つつんなら。

友、親友、恋人、すべてを利用し尽くしてやる。

だからそれまではこの茶番に付き合っ
てやる。

さあ！とんでもねえ規模の戦争を始めようじゃねえか！……！！

『真実』（後書き）

はい。自分で書いていて意味不明です。

本編に関わるは半分半分と言ったところでしょうか

感想、アドバイスどしどし送ってください

第15話「やっぱり戦争は白兵でねえとなあッ!!」 (前書き)

傭兵らしい事をしてなかったんで、執筆しました！

本編を書かずにすいません！

グロイです。

第15話「やっぱり戦争は白兵でねえとなあっ!!」

第15話「やっぱり戦争は白兵でねえとなあっ!!」

「サーシエス」

現在昼休みの前

「サーシエス、昼飯一緒に食べないか？」

「ああ。かま「pipipi」少し待ってくれ」

端末にきたメールを読む。・・・仕事か・・・

口元がニヤリと歪む

「一夏悪い、急用入った。それと早退するって千冬に言っといてくれ！」

「お、おい！」

後ろで一夏が言っているが無視して学園から出て、アルケーを起動し目的地に向かった。

「アフガニスタン」

現地に着くのに1日も掛かった

「おーおー派手にやってんじゃねえか」

そこでは所々から煙が上がり、銃声が聞こえる。

メールの内容はこうだ。

『アフガニスタンで紛争があり、そこにIS5機が存在、紛争を終わらせISコアの回収。

尚、銃火器の使用を許可する。報酬は1億』

これは国連からの依頼だ。簡単に言えば、人を殺して来いと言っている。

今回はIS絡みだから報酬がけたちげえだ。

「さあ、始めようじゃねえか。とんでもねえ戦争ってヤツをよお！」

「

アルケーに収納してあるバレットM99、FN P90×2、AK-47、手榴弾、ナイフなどを取り出し

上空のヘリにバレットM99を向ける。標準を合わせ引き金を引く。

1発の弾丸は吸い込まれるようにヘリに命中。そして煙を上げながら墜落そして爆発。

それと同時に視線がこちらに向き、銃弾が飛んでくる。

「やっぱり戦争は白兵でねえとなあつー！」

そして駆けた。

それからは一方的な虐殺だった。

あるものは、頭を打ちぬかれて殺され、

あるものは、設置された、地雷を踏み、殺され、

あるものは、命乞いをするがナイフで刺し殺され

あるものはクレイモア地雷をくらい蜂の巣になり、

あるものは、バレットM99により狙撃され、体が真っ二つになるもの

あるものは、銃弾を受けて、脳や臓器をぶちまけているもの

あるものは、手榴弾で爆死された。

それを見た兵士達は逃げようとしたが、サーシエスの凶弾からは逃げられなかった。

そして徹底的に殺し続けた。瀕死の奴の息の根も止めた。

そこは血の池地獄。何千人もの死体とその中に立つサーシエスのみ。今サーシエスの心は高鳴っていた。

久々に人を殺した高揚感。特に命乞いをした奴を髑髏り殺すのはたま

らない物だった。殺しても殺しても
収まる事のない殺戮衝動。そして気づいた。

・ 戦争が・・・人を殺すのが好きで好きでたまらないグズ野郎だと・・・

そして

俺の居場所はここなのだと・・・

すると空に光る物が5つ。それは目的のISS機。

それを見ると口元が歪む。

ああ、・・・俺はまだ殺せるのだと。

そして、アルケーを展開すると、今までより強い光が包んだ。
まるで、俺にも殺させる。とっているかのように・・・。

ISS機はどれもラファール・リバイブをいじくった機体だった。

「掛かって来いよ！！まとめてお陀仏だ！！！！」

空のISS機に向かっていった。

5機は銃を乱射するが、どれも当たらない。

「まずは一人目！」

バスターソードを2本持ちクロスさせて一人を斬る。

その斬撃は絶対防御もやぶり操縦者を真っ赤に染めた。そしてそのまま落ちていく。

「お前！よくもクリスを！！！」

先ほど殺した奴のことだろう。怒りのままに突撃しブレットスライサーと鏢競り合いになる。

そして徐々に押されているように演技をする（……………）

「もらった！」

片手でマシンガンを出し、銃口を向けるが……

「ところがギッチョン！！！」

「え？」

両爪先からビームサーベルを出し、両腕を切断。斬られた腕を見て初めて理解しただろう。

自分の腕が切られたことを……

「ぎゃあああああああ！！！」

悲鳴を上げながら、落ちていく奴にランチャーを向け

「ぐ臨終だ」

発射。赤黒い粒子ビームに包まれた。操縦者は死んだがコアは無傷

だ。

残り3人を見ると怯えた表情でこちらを見ていた。

「本部！！援軍をよこしてくれ！！繰り返す！……」

だが通信が繋がらない、なぜならバインダーについている、G N ステルスフィールドが発動されていたから。

すると一機が逃げ出したが、

「にがさねえよ！！！！」

後ろのバインダーからミサイルを射出。機体に当たるとG N 粒子が機体の中に送り込まれ、爆破した煙からはボロボロのI S と血まみれの女が出てきて、そのまま地面に落ちた。

その時、ぐしゃつと音が聞こえた。

「連携で行くわよ！」

「ええ！」

突っ込んでくるが

「行けよ！ファング！！」

「く！」

ファングが射出。ビームを打ち続け1人の機体の動きが止まった。
・

泣きながら命乞いをする女に頭の装甲を解除して綺麗な笑顔で言った。

「やだ」

グシャア！

女の頭を握りつぶすと顔に返り血が飛び散る。

「くくく・・・」

「はははははあはははは！！！！！！最高にハイって奴だぜ！！！！」

空に向かって吼える姿はとても残虐なものだった。

その後、国連にISコアを渡し、報酬を貰いIS学園に帰った。

尚、この戦闘の死者は4444人という、不吉なものだった。

「すみません。遅れました」

3日後IS学園に着き、教室を開けると・・・

一夏とボーデビツヒがキスをしていた・・・は？

「お前を私の嫁にする！決定事項だ。異論は認めん！！」

ええええええええええええ！！！

クラスは絶叫する。

この3日間になにがあった？

第15話「やっぱり戦争は白兵でねえとなあッ!!」 (後書き)

いかがでしたか？

サーシェスってこんな事しそうですよね？

これを書いているとき以上に体が熱くなりましたw

そして最近もう一個ISの小説書こうかなと考えています！

感想、アドバイスどしどし送ってください

第16話「深緑の狙撃姫」(前書き)

腕にひびが・・・

ゆっくり見ていってください。

第16話「深緑の狙撃姫」

第16話「深緑の狙撃姫」

唯衣にこの3日間の事を聞いた。

簡単に言うなら

一夏のフラグが2つ増えた……との事。

俺としてはVT事件の方が大事だと思んですけど!?

現在アリーナで唯衣の機体を説明している。

「……でこいつは『アサルトモード』になる。わかったか」

「ええ」

「それと……できたぞ」

「ユイ、ヨロシクナ、ヨロシクナ」

差し出したのはオレンジ色のハロ

「ありがとう」

「それとこいつを機体に量子化して積むとピッドを操作してくれる。そしたらお前は射撃に集中できるだろ」

「そこまで考えてくれてたんだ……ありがとうね」

「気にすんな。それじゃあターゲット出すからそれを打ち落とせ」

「了解！」

出した数は50機。どう対処するか楽しみだ……

（唯衣）

私の視点は初めてだね。

50機のターゲットが現れる。多くない？と思いつつサーシエスを見ると

口元をにやつと歪ませこっちを見ていた……意地悪だ。
内心愚痴りつつもピストルを両手に持つ

「んじゃ、はじめ」

その言葉で動くターゲットが動き出す。それに合わせてトリガーを

引く。

一発も外さずに確実に打ち落ち。数が10機以下になると、ライフ
ルに持ち替えて

「狙い打つ！」

狙撃を始める。相手も反撃してくるがトリガーを引くと同時に回避
行動を取っているため
当たらない。

「ラスト！」

最後の一体を打ち抜き大体の操作を覚えた。

「おつかれさん」

こちらにタオルを投げってくる。

「少し意地悪したでしょ……」

「な、なんのことかな」

目を逸らして口笛を吹く。

「買い物に付き合ってくれたら許してあげる」

腕に抱きつき上目遣いで顔を見る

「わ、わかったから離れてくれ／＼／＼」

「ふん。照れてるの？」

「うるさい！」

そしてアリーナから出る二人を、5人組が見ていた。

第16話「深緑の狙撃姫」（後書き）

簡単に仕上げました。

そして本日新しいISの小説を更新しようと思います!!

よかったら見てください!!

感想、アドバイス待ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3984x/>

IS《インフィニット・ストラトス》紅き傭兵の息子

2011年10月19日20時16分発行